

TOP INTERVIEW



鷲崎
早雄

静岡産業大学
学長

わしざき・はやお

1945年生まれ
1968年 東京大学工学部卒業

富士製鐵株式會社(現日本製鉄株式会社)入社
製鉄所生産管理部、本社経営計画システムの企
画開発に従事

1989年 ビジネス・システムコンサルティング会社設立
2002年 静岡産業大学経営学部教授

2016年 静岡産業大学学長
学術博士(東京大学)。専門は経営情報学、経済工学

東海で小粒だがキラリと光る大学に

本学は、静岡県の磐田市と藤枝市に2つのキャンパスを置き、経営学部と情報学部の2学部、学生数約2000名を有する大学です。母体である静岡学園高等学校の創立者牧野賢一が、出身地の磐田市から強い要望を受け、1994年に公私協力方式により誕生しました。

牧野の提唱した建学の精神「孝友三心(服する心、感謝する心、全うする心)」を継承発展しつつ、2000年に制定した新理念「『東海に静岡産業大学あり』といわれる、小粒だがキラリと光る個性ある存在になる。」は、地域と共に発展するという本学の特徴を打ち出したものです。これをより追求したのが2006年の県民大学宣言で、静岡県に人材を輩出するために本学は貢献するということを、はっきりと明示した意味合いを持っています。

私は2002年に本学に入り、2016年4月に学長に就任しました。大学での専門は数理工学で、鉄鋼会社に入社後コンピュータ技術に携わりながら、大型装置に向き合う鉄鋼会社ではダウンサイ징に伴う新技術に関われないというジレンマから、会社を飛び出し独立しました。本学には、経営学部に情報マネジメント学科を設置した際に、今でいう特任教授の公募があり、当時の大坪学長にお会いしたところ先生の魅力と熱意に惹かれ、こちらに参ったという経緯です。

地域と一緒に育てる実学教育

理念と宣言からも、静岡県における本学のポジションは、地域で学び、地域に残って活躍できる人材を育成する大学です。小粒だけどキラリと光るユニークな教育をしようと、2007年に「^{おおばけ}大化け教育」をスタートしました。これはミッションや3つのポリシーに掲げる、偏差値では測定できない個々の潜在能力を引き出し、本学の新しい教育法により、学生自らが意欲的に学ぶことで大化けすることを具現化する教育です。

これを叶えるために、地域と連携した「実学教育」を重視しています。知識や理論を教える一方で、それほどどのように社会の現場で実践されているかという両面を、学生にきっちりと理解してもらうためです。

代表的なものは、「冠講座」と「キッズスクール」「スポーツスクール」になります。まず冠講座は、静岡県に必

要な人材を大学と地域社会が一緒に育てようという、本学ならではの講座です。2020年4月現在、電通東日本、ジュビロ、静岡銀行、藤枝市、磐田市等、静岡県と関係の深い16の企業や自治体等が寄付講座を開講していて、リアルな仕事の内容や課題、最先端の事例を学べる現場教育の機会になっています。例えばジュビロとは、プロスポーツのリアルな経営・運営・チーム作りを学んだうえで、ジュビロ磐田のホーム「ヤマハスタジアム」での来場者向けイベントの企画・運営に学生主体で参加しています。

冠講座は「経営特別講座」という科目名で単位認定される経営学部の共通科目でしたが、後述する2021年度の新カリキュラムからは学科専門科目群に組み込み、科目名も「広告マネジメント(電通東日本)」「金融・証券市場論(静岡銀行)」等、より専門性を明らかにした科目名に切り替えます。

さらに2005年から、幼児に体を動かす楽しさを教える「キッズスクール」と、小学生に4競技(サッカー・体操・トランポリン・柔道)の技術指導をする「スポーツスクール」を、いわた総合スポーツクラブで実施しています。本学クラブコーチが発達段階に応じて技術指導し、技能・指導力に優れた学生がサポートします。学生にとっては、授業で学んだ子ども教育の知識を現場で実践できるだけでなく、スクール運営を学ぶ教育にもなっています。

こうした一人ひとりの個性を伸ばす実学教育により、本学の学生は物事をポジティブに考え、積極的に地域に出てコミュニケーションを取りながら活躍しています。こうした姿を見ると、地域から本学の学生の人間力を高く評価頂いていると実感します。

コロナ禍で開花した学内ICT化

本学は文系大学ですが、これからは経営にも情報技術や情報処理能力が必要です。そこで学生に一人1台個人PCを持たせて授業で使用するBYOD(Bring Your Own Device)を導入しようと、2017年にICT研究機構を立ち上げ、学習者中心の双方向型オンライン教育の研究を進めてきました。ですから、コロナ禍で

世の中がガラッと変わった時にも、スムーズにオンライン授業を実現することができました。一番役立ったのは、ネットワークインフラの整備と回線をかなり太くしておいたことです。学生ポータルにアクセスが集中してもサーバが落ちることなく、前期のほとんどの科目を対話型のオンライン授業で行うことができました。後期もいわゆる講義はオンライン主体で、科目数の51%に当たる対面授業も少人数のゼミや実習なので、キャンパスにいる学生は全体の2.3割という感染予防策がとられています。また車で1時間かかる2つのキャンパス間でこれまでより手軽にオンラインの会議ができるようになったのも大きな効果でした。

新学部「スポーツ科学部」

2021年の4月から、現在の経営学部と情報学部を改組し、経営学部とスポーツ科学部の2学部体制とする新カリキュラムがスタートします。これは、経営学部のスポーツ経営学科を学部へ昇格し、名称もスポーツ科学部とすることで、経営から切り離したスポーツ科学の分野を拡げ、よりカリキュラムを充実させることができます。

さらにスポーツは「する、観る、支える」と、文化的側面も多く持っています。将来的には、例えば「する」の生理学や医学等の学際的な面白さだけでなく、「観る」の文化との融合、「支える」の経営やビジネス、社会学との関係等、学問の拡がりをしっかりと発展させていくと目指しています。

今後の方向性として、まず教学面においては、今言われるZ世代や、文科省GIGAスクール構想にもあるように、生まれた時からスマホがあるような世代が大学に入ってきた時に、デジタル対応と教育課程の変革に大学としてどう対応しておくべきか。また、経営面では地方の小さな大学として、小粒でもキラリと光る個性を持った大学としての存在価値をいかに明確にしていくのか。これが今後対峙すべき大きな課題だと考えています。

RCM

(撮影 落合裕也)